

情報 ひがし労

2月21日付の河北新報にて

武田徹さんの記事が掲載されました。

酷寒の避難 光景重ね

① 元高校教諭 武田 徹さん(82) ー福島市

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから24日で丸1年となる。爆撃で変わり果てた町並み、銃声に追われるように避難した市民、平和を脅かす存在に「変化した原発」。終わりの見えないウクライナの戦況に、東京電力福島第1原発事故を経験した福島の人々は、自らが見た光景を重ね合わせる。彼らの言葉を紡ぎ、福島からのメッセージを伝えたい。

「年金」の文字が黒く塗りつぶされた封筒に、使い捨てカイロ1個が入っていた。行政機関からの封筒を再利用したとみられる。つ

たない字で岐阜県の住所が記されていた。

「決して生活は豊かではないのだから」。受け取った福島市の元高校教諭武田徹さん(82)は、封筒の筆跡を目でなぞった。

武田さんは東京電力福島第1原発事故の避難生活で出会った支援者と共に、昨年12月からウクライナに使い捨てカイロを送る活動をしている。ニュース番組で活動が広く知られ、1月までに集まったカイロは計31万個に及ぶ。

20分を送ってくる人や、「家族6人で集めました」と直筆の手紙を同封してきた人もいた。カイロはどんどん増え、対応に追われていたとき、再利用の封筒で1個だけのカイロが送られてきた。言葉や立場を超えた何かを感じ「何としても届けなければいけない」と強い使命感に駆られた。

「今日のキウは氷点下3度か」。避難生活を強いられ、凍えるように身を寄せ合うウクライナ市民がテレビに映ると、武田さんは原発事故後に燃料に困ったあの日のことを思い出す。

2011年3月12日。事故発生から間もなく、妻と娘、飼っていた犬と猫を連れ、マイカーで福島市の自宅を出た。雪が降っていたが、車のガソリンはタンクの半分しかない。道中に妻は体調を崩した。

やっと入った新潟県のガソリンスタンドの給油は上限5リットルと定められていた。これでは息子のいる東京まで持たない。しかし事情を察した店員が「間違ったというところはおきましよう」と多めに給油してく

れた。武田さんは無事、東京にたどり着けた。人のぬくもりに命拾いした。

何の縁もなかった米沢市だ。「みんな同じ人間でしょ、多くの支援者に支えられ？」と武田さん。国同士の。福島市に戻った武田さん。戦争と突然の原子力災害。んは「何かで恩返ししたい」。両者は異なるが、犠牲となつて。避難者に心ない。同者は同じ一般市民だ。言葉が向けられることも。た。「日本人もウクライナあったが、差別される人も関係ない。困っているわけではない。助けが必要な人を助けたい」。武田さんに手を差し伸べる大切さの思いは多くの共感を集め、海を渡った。



使い捨てカイロの送り主から届いたメッセージを読む武田さん。全国から届いた手紙は約170通になる＝2日、福島市